高卒副頭取

江波戸哲夫

講談社文庫

高卒副頭取（こうそつふくとうどり）
江波戸哲夫（えばとてつお）
© Tetsuo Ebato 1997

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1997年2月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——信毎書籍印刷株式会社
印刷——信毎書籍印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263446-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

高卒副頭取

江波戸哲夫

講談社

江苏工业学院图书馆
藏书章

目次

火の手……7
袋小路……24
緊急早朝会議……41
夜更けの電話……59
肩代わり……78
ネコの死体……93
頭取の揺さぶり……113
逆襲……138
週刊誌……159
反抗……180
隠し撮り……203
頭取の力……226
誤算……249
桜子……274
北軽井沢……296
尾頭付き……320

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

高卒副頭取

火の手

1

東西銀行専務取締役の東勇太郎は、自分の部屋の大きなデスクの前に腰を降ろし、まるでわが身を締めつけるかのように固く腕組みをしていた。何者からか自分を守っているようにも見える。

両眼はしっかりと閉じられ、額の真中に深いしわが一本、刻まれていた。

よく見ると、その薄い唇がかすかに動いている。何かをつぶやいているようだ。

東は何かを一生懸命に考えるときは、いつもその姿勢になる。そして時どき、

「馬鹿な」とか、

「いかん、いかん」

などと部屋中に響くような大声を上げる。

いま東が考えているのは、東西銀行における自分の前途についてだった。

自分は専務取締役という現在の地位より上に行くことができるのか、それとも今後は関連会社に追い出されてしまうことになるのか。

かりに関連会社に行くことになったとしても、そこは業績の安定している一流会社で自分は楽をして威張っていられるか、それとも業績を建て直すために苦労しなくてはならないオンボロ会社なのだろうか。

東はこの先もう一苦労くらいしてもいいと思っている。それくらいの気力体力はまだ持ちあわせている。しかし、どうせ苦労するのなら東西銀行で、さらに上のポストに上がるための苦労をしたいものだ。

頭取になることは諦めている。高卒の自分が専務にまでなれたのだって、東西銀行では初めてのこと、行内の高卒の行員から〝希望の星〟と仰ぎ見られている。

しかし東は満足していない。頭取にはなれなくとも、副頭取にはなれるかも知れない、いやなってやろうと思っている。

(今の役員の中で、実力はおれが一番だ)

東は眼を開いた。

大きく強い光りを持った眼だ。

鼻は鼻梁が日本人離れして太く逞しい。どことなくライオンの頭部を連想させる。銀行の専務というより、もう少し荒っぽい仕事をやっていた方が似合いそうだ。

四国の片田舎の高校を卒業して、東西銀行に入ってからほぼ四〇年、その逞しい鼻柱でラ

イバルを弾きとばし、この地位にまで伸し上がった。

じりん、とデスクの上の電話が鳴った。

東は体を締めつけていた腕を解き、受話器をとった。

「はい」

関西弁ふうの訛りのある低い声で言った。

「ああ、わしだ。すぐにわしの部屋まで来てくれんか」

その声は東西銀行会長の生田正のものであった。生田の声と分かった瞬間に、東は椅子から立ち上がっていた。それが東の身についた習慣だった。

「はい、すぐに伺います」

東は丁重に言い、受話器を置くとそのまま部屋を出て、会長室に向かった。会長と頭取の部屋は、他の役員の部屋のあるフロアより一階上に位置している。

頭取室の前を通るとき、中に頭取の山城幸一がいるかどうか耳を澄ましたが、何の気配も伝わってこなかった。

会長室の前に立ち止まり、東は小さく深呼吸をした。さっきの電話の口調では、生田は機嫌がよくなさそうだった。機嫌のよくないときの生田は、扱い方を飲みこんでいるはずの東も、もてあましぎみになる。

ノックをして中に入った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

広い部屋である。東の部屋の三倍は優にある。広さばかりでなく、一面に敷きつめられた絨毯といい、壁のモディリアニといい、内装の贅沢さでも三倍は超えているだろう。

その贅沢な空間の中央に、生田は手を後に組み、心持ち胸を反らして立っていた。

「おい、弱ったことになったよ」

東を迎えた第一声がそれだった。

「何事ですか」

東は物々しい口調で言った。

「H商事の件、警視庁が動きだしているらしい」

「ほんとですか」

「嘘など言ってどうする」

「どこから洩れたのでしょう」

生田はいくぶん唇を歪めて不快そうな表情になった。そんな表情を作っても生田の端整な顔立ちには変わりなかった。

白人のような形のいい目、形のいい鼻、形がいいばかりではなく強靱な意志を表している顎、どれもこれも東とは対照的にいかにも風格のある辣腕バンカーにふさわしいものであった。

今、生田が口にしたH商事というのは、日本で有数のやくざ組織、平岡組の暗号である。東西銀行は一年ほど前からある事件をきっかけとして平岡組と取引きができている。それが

公になっては困るので、このことを知っているごく少数のメンバーは暗号で呼ぶことにしている。
「うちの中かも知れん」
短い沈黙の後、生田がぽつりと言った。
「しかしそれが公になったら、頭取だって困るじゃないですか」
生田がうちの中と言っただけで、東はもうそれを頭取だと極めつけて話している。
「あいつは自分には責任はないつもりでいるのだろう」
「それじゃ、世間は通りませんよ」
「あいつは通すつもりでいるのだろう。それとも」
と言ったところで言葉をとめて、生田はぐっと奥歯を噛んだ。力強い顎にふとい筋が浮かんだ。
「それとも肉を切らせて骨を断つ気なのかも知れん」
「頭取は本気で会長と事を構えるつもりなのですか」
「ああ、そうだろう。いままでもそうしてきたじゃないか。こうなったらこちらも覚悟せんとな……。しかしその前に実情を調べなくてはならん」
山城幸一が頭取になったのは三年前だった。山城を頭取に引き上げたのは生田だったが、二期目にはいると生田の影響力を煙たがり、こっそりその力を殺ぎ落そうとし始めた。
生田が気がついたときにはすでに役員の中にも山城のシンパがふえており、東西銀行が中

心となっている企業グループ「銀杏会」でも山城は発言力を増していた。
東が生田の一の子分であることは、東西銀行中の人間が知っていた。山城の勢力が強くなることは、東にとっても危険が迫ってくることであった。
「どうしますか」
「早急に警視庁がどこまで掴んでいるのか、これからどう出るか調べてくれ。やり方はすべて君に任せる」
「はい、分かりました」
東は素直に言った。
東は東西銀行の内でも外でも、周りの中の全ての人間に冷徹な観察眼を向け、その内心を推し量った。誰とも心を許して付き合おうとはしなかった。ところが生田に対してだけは、まるで子供のように素直になった。
生田は東が東西銀行に入行したときすでに都心の有力な支店で得意先課長をやっていて、その辣腕ぶりは東の配属された大阪の支店にも時々聞こえてきていた。その後、東自身も高卒の行員としては前例のない目覚ましい成績をあげ、都心の支店に栄転となり、そこの支店長だった生田のもとに働くことになったのだ。
生田は帝大出身のエリートで、銀行の中での立場は東と全く違っていたが、人の三倍は働く東になにかと目をかけてくれた。
それ以降二人は何度となく上司と部下の関係になった。そのつど自分を引立ててくれつい

には専務にまで抜擢してくれた生田が、東には恩人という言葉をこえ生身の人間ではない眩しいもののように思えていた。
「可及的速やかに実情を把握してくれたまえ。後のことはそれからだ」
「会長はどこからその情報を手にいれられたのですか」
「私の懇意にしているある筋からだが、それとは別ルートでゼロから君が調べてくれたまえ」
生田はためらいのない口調でそう言った。

2

ロビーの入口に向けていた東の目が、いくつもの人影の間に見覚えのある桜子の姿を捉えた。
その顔にどんな表情があるのかも分からない距離なのに、右足をわずかに引きずっているのだけはすぐに分かった。
東は胸が痛むのを感じた。妻の洋子も桜子自身もそんなに目立つはずがないというが、東にははっきりそれが見えてしまう。
桜子がまだ小学生だったころ、東は桜子に自転車の乗り方を教えていて自転車を倒してしまった。桜子も激しい勢いで倒れて足首を折り、いつまでも松葉づえが外せなかった。その後しばらくは足を引きずっていた。

桜子が中学に行くころにはほとんど跡形も無くなっていたのに、東にはそう見えなかった。その足を不憫に思う分、桜子をネコ可愛がりにした。

「おとうさん」

七、八メートルも向こうから、桜子は大きな声で東を呼んだ。

(子供でもないのに)

と、東はなんだか照れ臭い気分になってしまう。もう二五歳にもなるというのに、呆れるほど無邪気である。それは東のまったく持ち合わせないものであったが、東は桜子のその無邪気さを好ましく思っていた。

「おい、そんな馬鹿でっかい声をだして。こんなに人様が一杯いるのだぞ」

「誰もあたしたちのことなんか、みていないわよ」

つい半年前だったら、こんなときそんな風だから結婚できないんだぞと思ったものだが、いまではその心配はなくなった。つい最近ようやく桜子の結婚が決まったのだ。

東は桜子が女子大を卒業するころから熱心に結婚相手を探し始めた。ところがなかなか決まらなかった。桜子の方で、その時それほど結婚したいという気が無かったからなのに、東はそれを足のせいにして、人知れず悩んだ。

ようやく決まった相手は、東の東西銀行での取引先の息子だった。そう大きな会社ではないが優良企業であり、その息子が跡継ぎになることは間違いなかった。それが本決まりとなった日、東は妻の洋子に赤飯を炊かせて娘に笑われた。

「今日は私をどこに連れていくつもりだ」
「マリオンの西武でいいの見つけてあるの。ねえ予算はいくらまで？」
「いくらにするかな」と少し思わせぶりにいってから、
「まあ今日はお前の気のすむようなものを選べばいいさ、予算枠なしにしてやろう」
「ほんと！　ラッキー」
桜子ははしゃいだ声を上げた。
「おいおい、そんな幼稚なことといっていると村木君に嫌われてしまうぞ」
「心配ご無用よ、村木さんはあたしの幼稚なところがいいんですって」
東が村木の父親と相談して二人を引き合わせたのに、いつのまにか桜子は村木に恋愛感情を抱くようになったらしい。あんなに桜子の結婚を心配していた東が、いつの間にか村木に少し焼餅めいた気持をかんじるようになっている。
東が先にたってロビーをでると、黒い大型の車が入口の前に止まった。
「あら、おとうさん、銀行の車なんか持ってきているの？　公私混同じゃない」
「人聞きの悪いことというなよ。とうさんは東西銀行にとって大事な人物だから安全のためにいつも車を使ってください、というのが銀行の方針なんだ。なにが公私混同だ」
口調は荒かったが、東は顔中に笑いを浮かべ機嫌よさそうである。桜子は東にとって唯一、心を許せる相手であった。
車がマリオンの前で止まると今度は桜子が先にたって歩き始めた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com